

紅茶缶の追憶

二〇一三年七月、図書館

お腹が痛い。下腹部の奥深くに、内臓が引き寄せられる感覚がある。寒気のかたまりが尾をひきながら、背筋を上り始めた。心臓うらを越えた辺りで、不意に力が入る。途端に、かたまりは花火のように弾けて、上半身を放射状に駆け抜けた。僕は体をたたみ、俯いてじっとこらえていた。毛穴の底から細かい汗がじんわりと満ちてくる。身震いがして、体が縮み上がる。共振して、所以のない焦燥感が胸の奥に起こった。心臓があるはずの場所を得体の知れない黒い真空が満たし、周囲の器官や組織を飲み込もうとしている。僕は堪らず、手の指をゆっくりと第一関節、第二関節と順々に丸め込み、握りこぶしを作る。首や肩、背中の筋肉をでたらめに力ませた。そのうち、体には少し暖かさが戻ってきた。

今日の図書館はひどく寒い。古い業務用の冷房からは、特有の底冷えする風が吹いてくる。天井付近、長方形の吹き出し口には監獄みたいな格子が掛かっている、その奥には暗闇がせまってきた。僕はこの場所を避けるようになって久しく、これ程まで冷えることを失念していた。この場所、薄暗くて閑寂とした三階北閲覧室に、最後に訪れたのは、まだ暑くなる前の事だった。

二年前、四月の中頃だったと思う。窓の外には冷たくてやわらかい春のもやが充滿していて、サッシの隙間から今にも滲み入って来そうだった。僕はこの席に座って、本を眺めていた。政治学科生、特に国際政治学を志す学生の三分の二が読むだろう教科書である。まだ序盤で、古代ギリシアの史学家であるツキジデスの著書『歴史』に言及していた。『歴史』におけるペロポネソス戦争の分析は、国際政治学で言うリアリズム、現実主義の先駆けだった。道徳的な議論に先だって、各国の軍事的均衡があつてこそ、平和は保たれるという。ただ僕はそんなことよりも、ツキジデスが、「テューキディデイス」と繰り返されることばかり、気を取られていた。

午前中の三階は静かで、読書や勉強をするには都合が良い。それでも、神経質な僕は、誰かがエレベーターホールから閲覧室へと入ってくる度に、意識が向いた。どうしてそこまで頑なに

足を上げないで歩くのか、という歩き方をする人間もいて、気に障った。その中で、不さんは僕の貧弱な神経を氣遣うように、全く氣配を殺して歩いてきた。

「倉木」

顔を上げると、不さんだった。「あつ」と言っただけ僕は喋れなくなった。それでも、そのうち話したんだらうと思う。どんな格好をしていたかとか、何を話したかというのが思い出せない。同じキャンパスで同じ学部の不さんに会うのは珍しいことではなく、四月のうちでも三回か四回は会っていたのである。二限がつまらなくて反吐が出そうだった、という事を言っていたかもしれない。

また、不さんは憔悴していた。前後の出来事から推察したのか、その場の印象なのか憶えていないが、僕はそう感じていた。あるいは四月の不さんは精神的に疲弊しているという先入観かもしれない。ある種の人間にとって、四月というのは多かれ少なかれ苦痛を伴う時期である。面倒な手続き、人間関係の変化、キャンパスの浮かれた雰囲気など、億劫な事が山ほどある。こんなにも狭い都心のキャンパスに余りに多くの人が詰め込まれる。僕の印象では、不さんは特に人ごみが苦手だった。何故かは分からない。男と女、集団と個人、凶太い人と自意識過剰な人、勝者と敗者。集団というのはとても多義的で、嫌気の指すポイントなんてそこにいる人間の数以上に見いだせる。総体として、暴力的でうるさくて圧迫的である。

その時の僕はよっぱど熱心に勉強していると思われたらしい。不さんは程なくして行ってしまった。ごはんに誘えば良かったが、腹は減ってなかった。疲れた様子が心配ではあったけど、不さんは自分の限界を分かっている自立した人間だったから、引き止めようとも思わなかった。それでも、不さんとさっぱり別れてしまうの一抹の淋しさがあった。

僕はポカんと、不さんが去っていったエレベーターホールを眺めていた。足首から下が冷えるので、しきりに靴の中で指を動かしていた。カウンターの向こう側でキーボードを打つ音が、有機的なリズムで加速と減速を繰り返す。ソファの方からは、満足げに雑誌をめくる音がする。すぐ後ろからは、ペン先を紙に叩き付けるようなせわしない筆記音が聞こえていた。それら諸処の音の狭間に、静寂があった。レコードの曲と曲の間に聞こえる音である。静寂の音は徐々に大きくなっていった。ふと、知らぬ間に始めていたタバコを、不さんが喫煙所でふかしている姿が浮かんだ。

この一週間後に不さんは自殺した。

二年と二ヶ月。何時何分頃の出来事だったのか知らないから、正確な事は言えない。ずいぶんと長い時間が過ぎ去ったことは確かだ。しかし、年月相応の積み重ねりのようなものを、僕

は感じる事ができなかつた。自分がいつも無意識に生きている気がして、嫌な気持ちになる。そうかといって、昨日の事だと考えるのも違和感がある。

二年間、僕は何をしていたのだろう。分らない。もしくは、こういう質問に瞬時に答えられる人間の方が少ないのかもしれない。言い争いで、「例えば？」と聞かれると、瞬時に答えられないのと似ている。現状の僕をこの二年間の帰結と考えてみたらどうだろうか。この二年間で僕は体重が59キロから64キロまで増えた。就職活動の時に元の体重に戻ったけど、就職を諦めたらまた太ってしまった。スタイルがいい彼女ができた。乳房は控えめで、ひざ下が長い。黒髪から見え隠れする下顎骨のラインが、森の小道に沿った小さなせせらぎの岩肌を縫う流れのような美しさをたたえている。これだけだとひどく楽しそうな感じがするけど、死にたいと思った事も幾度かあった。ここ三、四年全てがうまくいっていないような気がして、自分が社会からはみ出して二度と戻れなくなるような気がしていた。けれど、次第にどうでも良くなった。タフな人間になったのだろうか。

不さんのことはどうか。

不さん……。不さん？ なんだろうか。良く分らない。難しい。お腹が痛くなってくる。得体の知れない真空が再び胸の奥に広がり始める。自責だろうか、それとも不さんが僕を責めているのだろうか。

気分が悪い。トイレに行こう。

或る水曜日

午後三時前、サークル棟二階のトイレの個室にいた。いつもだったらこんな汚いトイレの個室には入らない。けれども、その日の催しは部屋でくつろぐ僕を矢庭に襲った。手にトレットペーパー三巻きして、便座を念入りに乾拭きする。ベルトを緩めて、ユニクロのジーンズを下げ、腰を下ろした。一息つくつと、着信音よりも大きなバイブレーションが一瞬のうちに膝ポケット、太もも、便座から便器と伝わり、個室中に響き渡った。見ると、サークルのメーリングリストだった。

『 題名 : message for OOOO』

本文 : from OO (不さんの本名)

至急！ 電話ください 』

何だろう。サークル運営で問題があったのだろうか。個人的な用事なら僕に電話してくるだろう。運営についてなら僕が連絡しても仕方ない。それよりも僕は今忙しいのだ。

「ふう」

体の奥から達成感にも似た満足感が沸き上がる。生理欲求を満たしたからであるし、何より先ほどまで単位申請をしていないゼミ形式の授業に潜入していたからでもあった。自分で教授にメールをし、聴講の許可を取った。積極的な関与を必要とする授業は取った事がなかったのが緊張したが、初対面の学生と当たり障りのない話をし、教授の質問にも落ち着いて答える事ができた。サークルでは出会わないような志の高い学生が多くて胸が膨らんだ。この一連のチャレンジは、自分で野菜を育てて収穫し調理して食べるような喜びがあった。

三限終わりのキャンパスは和やかな空気に満ち満ちている。一日の時間を消化した生徒が、生協でお菓子やカップ焼きそばを買って、部室や廊下、中庭で談笑している。そんな空気がトイレの個室にまで及んでいた。

個室の壁のおびただしい数の落書きを僕は眺めていた。「おまんこしよう」というのが目にはいった。

部室に戻ってソファでふんぞり返っていると、さとやんが勢い良くドアを開けた。さとやんを含めて、だいたいの方は部室のドアをだらだら開けるから、僕はぎよつとした。

「不の話聞いた?？」

さとやんはあきれているような口調で言った。

「電話してくれってやつですか?」

「あー……誰か電話した?？」

「いや、僕は」

一緒に部室にいたフェンダーも電話してないと言う。

「何だったんですか?」

「いやまあ、ちよつとね」

そう言って、足早にさとやんは行ってしまった。疑問に思いつつも、僕は oasis の『Definitely Maybe』の楽譜を手に取り、読み始めた。フェンダーは向かいでギターを弾いている。簡単なフレーズをミスした。何度かチャレンジしていたが、結局諦めてしまった。今度は携帯を触り始めた。僕と目が合った。

「どうした?」

しばらく迷っている様子だった。それから、フェンダーは僕を廊下に連れ出した。

「これはまだ本当か分からないんですが……」

「はあ」

廊下にはイマジンのポスターが貼ってある。フェンダーの肩越しに、虚ろな表情のジョンレノンと目が合った。

「なんか、三田キャンで不さん飛び降りたらしいです」

ん？

「わからないんですけども、twitterで検索したら、三時前に三田の中庭に消防車とパトカーが来てるって写真あげてる人がいたんで、本当ぽいっす」

ん？

飛び降りた。飛び降りた？ とびおりた。トビオリタ？

そうか、飛び降りたのか。ふうん。声に出しても、葉脈だけ残して腐敗した葉っぱが、ひらりと落ちていくようだった。

だから、僕は一般的な飛び降りを頭の中にイメージした。主演のキャラクター（「自殺しそうな人」としよう）を少しずつ不さんに置き換えてみる。まず、ぼんやりとした不さんのような顔をはめ込める。次に背格好、服装と、順々にインストールしていく。ああ、あと背景を三田キャンパスにしくちやいけない。それでも、いまいち、判然としない。不さんは中庭にいて、僕といつものように話している。

そんな想像は僕が不さんを殺すようなもので難しいはずだと、ふと気付いた。いけないことだ。そんな瞬間から、否応無く断片的なイメージがよぎり始めた。中庭から見上げた大学院棟、入ってすぐのエレベーターホール、リノリウムばりの廊下、箱の中のような薄暗い階段、再び中庭から見上げた大学院棟。するすると最上階の窓が開いた。

「えーと……助かったの？」

翌日

甥が飾りのかぶとをかぶっていた。端午の節句で、僕の家では祖父母も来てお祝いをしてきた。ちらし寿司と豚の唐揚げが食卓の上にある。甥は言葉にならない言葉で何かを懸命に主張

している。祖父は嬉しそうに眺めていた。後から写真を見比べてみると、この頃の祖父は、だいぶ痩せてきていた。

僕は終止、不さんの自殺について考えていた。理性的な人間がこの世に見切りを付けてしまうのか、感情的な人間が一時の激情に飲まれるのか。僕自身なら、明らかに後者のパターンだろう。僕は自分が可愛い。この世に何も残すことなく若くして死ぬなんて嫌だ。僕は、そんな気持ちにさせた世間を責めるだろう。

不さんは前者だろうか。不さんには何か僕には分からない理想があったように見えた。昔から難しい本ばかり呼んでいるから、きっとそうだろう。愛聴している音楽ですら、それを示めしているように思える。不さん苦悩はプログレッシブロックの、複雑に入り組んだ構成の合間に繰り返される、重厚な主題のようだったろう。また、不さんに取ってこの世界は、騒音ともつかない音が不規則な規則によって組み合った現代音楽だったかもしれない。この世の甘い部分を集約したような（時に酸味があっても、それは甘酸っぱい程度のものである）、メロウなインポートの音楽を聞いている僕とは違う。

不さんの生死は未だ分からないが、自殺をしたことは、どこかで仕方がないと思っていた。不さんは教養があるから、高明的な理想があったに違いない。同時に、人より与えられている気力が少なかった。不さんが思う通りのことをするのに、世間が求めてくる対価は、あまりにも大きなものだったのだろう。そういった状態で長らく生きてきたのだ。うまく、折り合いを付けていたように見えた。でも、ついに不さんは、自分の理想と実際の生き方の齟齬に耐えられなくなったのだ。不さんの自殺は切腹のようなものだったのだ。僕の感情論で止めることができなかったんだ。

不さんがもし死んでしまっていたら、僕は寂しい。本人が望んだなら、行為自体は否定できない。でも、少なくとも僕にとってはコンプレックス含めて何でも話せる先輩だったし、兄のような存在だった。一言ぐらい、何かあっても良かったじゃないか。

「ちよっと、出かけてくる」

僕は三田キャンパスに向かった。Podは何も選ばずに、再生ボタンを押すと全曲シャッフルになるから、好きな曲が流れるまでひたすらカチカチしながら、自転車を飛ばした。まず、The Beatlesの『Tell Me Why』が流れて、次にBoz Scaggsの『Lowdown』が流れた。それから、oasisの『Live Forever』が流れた。この曲は僕がサークルに入って最初に練習した曲だった。何か、ドラマーの不さんがギターを教えてくれた。今考えると、不さんがoasisなんて弾き語りできたのは意外だ。

近づくにつれ、合格発表を見に行くような恐ろしさが増してきた。正門の大通りを挟んで向かいに自転車を止めた。赤信号が長い。僕の心理状況が影響しているんじゃないかと、ここはいつも長い。横断歩道からも院棟が見えるのに気付いて、僕は思わず嘆息をもらした。道を渡って正門に入ると、中庭に続く階段がある。段差の一段一段が微妙に低いのが気になる。自分の息づかいだけが、やたら大きく聞こえる。まず、第一校舎と銀杏が見えて、それから図書館、ソテツの木と見えてくる。休日だから人がいない。院棟の方は見なかった。階段を上り切ったところで、否応なく院棟の一階部分と、出入口前に広がるコンクリートが左の奥に見えた。ゆっくりと視線をあげていく。二階、三階、四階、五階、六階、七階、八階。

院棟が八階建てであることを、初めて知った。教室の窓が複数、廊下に面した窓が一つある。落ちた場所がほしいどの辺りかが分かった。僕は院棟の方には行かずに、真つすぐ喫煙所に向かった。授業のある日はほしい此処に友達がいるけど、今日は誰もいない。四台ある自動販売機の商品を、横書きの文章を読むように全てチェックした。何も飲む気がしない。図書館の司書さん達が談笑しながら、本を山積みにした台車を押して、院棟の横の西校舎に続く道を歩いていった。

早く帰って甥っ子と遊びたいと思った。僕は院棟へ歩き出した。その間、ずっと不さんが落ちた辺りを見ていた。喫煙所からは二〇メートルくらいだろうか。何も無い。ただ灰色のように見える。一五メートル手前。何も無い。一〇メートル手前。この辺りから、でこぼこした地面であることが分かった。五メートル手前。所々くすみがあるけど、血の跡のようには見えない。一メートル手前。何も無い。現場を踏みたくないから、廊下の窓の真下のやや横から地面を眺めていた。僕は周囲を見渡して誰もいないのを確認してから、しゃがみ込んだ。一見何も無い。しかし、目を凝らすと、親指と人差し指で作った輪っかぐらいの黒い跡があった。血の跡だとは断言できなかった。

お葬式と海

お葬式の前の日、僕は良く眠れなかった。最初は、平生見るような平坦な夢を見ていた。そのうち、いつの間にか The Beatles の Revolution⁹ が聞こえていて、象徴的な映像が数秒おきに流れていた。加速度的に音量が大きくなり、シーンは次々と転換していく。ある瞬間、オーケストラヒットと同時に映像は断絶して、僕は朝に気付いた。カーテン越しの光に、淡いピンクを帯びた部屋が見える。しばらく、その体勢のまま、目玉をぐるぐる、あたりを見回していた。起き上がる時、体が軽くて、肉体から魂だけ抜け出したような感覚だった。暖かくもなく寒く

もなく乾いても湿ってもいないつかみ所のない朝だった。直前まで見ていた夢について考えようとしたけど、一切のイメージが既に記憶から失われてしまっている。家の前の道を、甲高いエンジン音が過ぎていった。

豁然として、今日が不さんのお葬式であることを思い出す。それはまるで、最も古い記憶の中にいた僕が、不さんが死んだ四日後という連続性の中に投げ出されたようであった。僕はまだ赤ん坊で、両親に抱きかかえられて家に帰ってきて、和室に敷かれた大人サイズの布団に、静かに寝かせつけられる。けれども、僕は起きていて、天井の木目を見ていた。障子越しの白い光に包まれながら、自分のいる世界を分かっているような分かっていないような感覚でぼんやりしている。そんな無意識な幸福が唐突に破られてしまったようだった。

前日、大した準備はなかった。大学の入学式のために買った黒いスーツを出して、黒いネクタイを父から借りた。不さんの死を母に伝えるのが一番面倒だった。隠していた訳ではないが、父にも母にも不さんについて、伝えていなかった。喪服の準備をするに当たって、とうとう説明しない訳にはいかなかったのである。今回のことを僕は悲しいのかよく分からない。それでも、自分以外の悲しみは、真偽を問わずに胸に訴えかけてくる。それが億劫だった。

「黒いネクタイ貸して欲しいんだけど」

「誰か亡くなったの？」

「うん」

「……誰？どこの人？」

「大学」

「クラスの子？」

「いや。」

クラスの友人ではなくサークルで、同期ではなく後輩でもなく先輩だと答えた。「一個上」だと言うと、母は何か勘付いたようだった。

「不くんじゃないわよねえ」

「いや」

「……病気だったの？」

「いや、何だろうな。」

母の疑問には意表をつかれた。そうか、病気という可能性もあるのか。また一つ気が重くなった。僕の口から言うしかないのか。病気と言えば病気だ。

「自分で……死んじゃった」

「え……どうしてよ」

僕はいたたまれなくなつて自室に逃げ込んだ。たしかに、普通の人は自殺する理由なんてない。母が不さんに会つた事があるのは中学の学園祭での一度だけだ。不さんは中学生離れた世慣れた物腰で学校での僕の様子について母に話していた。末っ子で可愛がられていた僕は家で学校の事を話さない。色々話してくれる不さんは頼もしかっただろう。大学で再会した事を、僕より喜んでいた。

また母の場合は、不さんのお母さんに感情移入してしまうのかもしれない。小さい赤ん坊でしかなかった息子が、自分で何やら難しいことを考えて死んでしまう。どんな気持ちだろう。「沢山の人が悲しむ。」という自殺を良しとしない1つの理由は、自殺をしようと思わない人間にとってとても説得力がある。でも、不さんはその程度のことには気が回らない人間ではないだろう。

夏の朝のような日射しだけでも、蝉はまだ冷たい土の中だ。なにより葉の色が淡い。中学生の頃から乗っている真っ赤な自転車グリスイ進んだ。カゴに何も乗っていないからだろう。東海道線では「The Who」を聴いていた。歌詞など憶えてないし聞き取れないけれども、その時の心情によく合っていた。『You Better You Bet』でのロジャー・ダルトリのハミングが、喋ると涙が出そうで「んん」としか言わない子供のようだった。それから、『Who Are You?』が流れた。

(フアーユツ、フッフ、フッフ。フアーユツ、フッフ、フッフー。)

コーラスが、キース・ムーンのドラムに乗って、東海道線より速い速度で、頭蓋骨の内側を暗い空間を駆け巡る。暗闇のその奥には不さんがいた。ふと、不さんが僕の頬をびよびよと引つ張つて遊んでいたことを思い出す。僕は昔、今よりも背丈が小さい頃に、今と同じ位の体重があった。その時に、皮が延びてしまったのだろう。不さんの手はとても冷たかった。

多摩川を越えてしばらくすると、小高い山の上に僕と不さんが通っていた中学が見える。考えてみれば、不さんが自殺する当日に寄り道していなければたどったであろうルートを僕は逆行している。道すがら、不さんは何を思ったのだろうか。前日の晩は何時間寝たのだろうか。何を思つて服を選んで、ご飯を食べたのか。もう死ぬんだったら、真っ裸で何も食わなくていいような気もする。電車の窓から見える景色を見て何を思ったろうか。外なんか見てないかもしれない。つり革に足をかけてぶら下がりながら、海老のように体を反つて、白目を剥いて向かいの人を見ていたかもしれない。無数の可能性があつて、考えるだけ無駄だった。そういう人間は

案外いつも通りだとは言うけども、「いつも」も分からない。いつかワンダーフォーゲル部で、鉄道オタクの後藤が東海道線の写真を携帯電話の待受画面にしていた。それを見て、「戸塚の踏切だよね」と不さんが言っていた。背景から判断したそうだ。普段の不さんは、その程度には窓の外を見ている。

受付では、人が悲しいと感じるようなコードで構成されたピアノソロが流れていた。清冽な高原にたたくむホテルとか美術館で流れている類いの音楽と近かった。違いと言えば、後者に含まれる親密さ、懐かしさ、帰り道ふと鮮烈な紅色の夕焼けを見上げたような感情が、前者では比較的排除されていた。それでも、両者は依然としてよく似ていて、どこかで美しさと悲しさが非常に近いものである証左のようだった。アリストテレスが『詩学』で、悲劇を見ることによって心が浄化される作用について指摘している。悲劇を見て心が浄化されるなら、僕の心はいま浄化されているのだろうか。

また、あえて小難しく考えると、この決まりきった演出は不さんの死を軽んじているような気もしてくる。固有の死に対してありふれた定番の音楽とは何事だろうか。葬儀屋に八つ当たりして、この所在なさを解消したかったのかもしれない。しかし、道徳の授業で聞いたように、日本では一分間に二人が死んでいる。そのぐらいに死はありふれたことなのだ。葬儀屋は正しかった。それに、不さんが好んで聴いていた現代音楽とかフランク・ザッパとか愚にもつかない音楽を流しても、皆困惑するだけだろう。

葬儀は滞りなく進行した。お坊さんのお経はうまくもなく下手でもなかった。僕は時おり、目を瞑った。不さんのことを考えているときもあれば、その他のことを考えている時もあった。不さんについては、主にワンダーフォーゲル部の時にことを思い出していた。僕の一個上の学年は三人いたが、ちゃんと練習にくるのは不さんしかいなかった。だから、不さんが僕含めた一年生の指導係のようなものだった。いつも、学校から一・五キロぐらいのところにある神社まで走って行く。少し休んだら、普通の建物で言うところ三〜四階分の階段を走って登り、ぼくらは頂上で倒れ込む。不さんは涼しい顔をして、岩に腰掛けて、笑っていた。てっぺんには保育園があり、園児達が奇異の目で見ていた。いつか不さんは登山部に入った理由について、「親が運動部に入れたがってたけど、自分は運動部という感じでもないから。」と言っていた。

その他に考えていたことといえば、琴音についてだった。琴音は不さんが所属していたもう一つのサークルの女の子である。細身で背が高く、いつも男じみた服を着ている。エントランスで見かけた時、普段はあまり見られないスカート姿だった。膝からつま先にかけての、固めの鉛筆で引っぱったようなシャープな線が描いていた。斜め後ろからみるウエストは細いとい

うより薄く、熟練した技術に支えられた工芸品のようだった。つつましい黒服をまとったしなやかな肉体のどうしようもない艶麗さに、卑屈な欲望を覚えた。

一人一人に花が配られて、「最後のお別れ」をする時になった。後ろで並んでいる間、こういう時の女の子の泣きぶりは見事だなあ、と思う。普段下らないことを言っている男友達まで涙を流しているのを見て、男のくせに泣くなよ、と思った。不さんが死んでしまっただけ、僕は悲しいのかよく分からなかった。もしかしたら、積極的に悲しいとはいえないのかもしれない。だから不さんの顔を見る瞬間まで、自分がそんなことになるとは思わなかった。棺桶をのぞいた瞬間、僕は涙腺が痛んだ。不意に、爆発的な勢いで泣き出した。頬が引きつり、上あごが何度もしゃくり上がった。元来僕は、涙が悲しみのバロメーターだとは思っていない。泣いているから悲しいとはいえないと考えていた。あふれ出す涙はいよいよ不可解だった。

並んでいる間、僕は不さんの顔を見るのが恐かった。八階から、飛び降りたのだ。石を落としたって粉々になる。実際は、若干紫みを帯びているものの、不さんは安らかな顔をしていた。しかし、その顔には意志が無かった。生きている人の寝顔は、何かしらの表情がある。何時間後かには目覚めて、パソコンを開いて「twitter」を見たり、もしくは暫く天井を見つめてぼんやりしたり、あくびをしてまた寝たりするんだろうなという予感がある。不さんに、そういった様子はもう無かった。不さんのお母さんが、「ごめんね」としきりに僕らに謝っていた。

エントランスに降りると、ガラス戸の向こう側が目映いほどキラキラしているように見えた。良い天気で、昨日までの肌寒い鈍色の世界が嘘のようだった。「暴力的な青空だ。」と誰かが言って、僕にはその表現がよく分からなかった。参列者は霊柩車を見送るために斎場の玄関付近に待機していて、僕は谷ヤンとOBの西田さんと話していた。

「バカだなあ不は、死ななくてもいいのになあ、たっはっはっは。」

西田さんは、空気が読めない人だ。節操の無い中年のような口調で際限なく喋り続けるし、小太りでひねくれていそうな見た目をしているので、サークルの半分くらいの人に嫌われている。でも、言っていることは筋が通っていて納得できるし、道化のような喋り方もどこか憎めない僕を感じていた。そのうち、西田さんは某大手銀行のキャッシュカードについて話し始めた。

「こないだね、倉木くん、UFJに口座を開いたんだよ。そしたらね、キャッシュカードがなんとミッキーマウスだったんだよ！ほらねー、良いでしょう！」

話しはじめから終わりに向かって、顔の奥から滲み出してくるようには笑顔があふれるのを、面白く思った。僕も同じ銀行のキャッシュカードを持っている。プーさんがソファに座って仲間達と本を読んでいる。ピングーは膝の上で、ティガーは背もたれに腕をかけて後ろから、イ

「ヨーが前から覗き込んでいる。僕はこの柄が気に入っていた。西田さんもプーさんが好きだと記憶していたので、おもわず見せてあげた。」

「おお！プーさんじゃないか！えー！？いいないいな！交換しようか！ねえ！ねえ！なんつって、たっはっはっは。」

「周りの何人かの人間がこちらを見ていた。」

お葬式の後、僕らは駅ビル最上階のステーキ屋に入った。窓の外には、遙か向こう刻み海苔のように横たわる防砂林まで住宅街が広がっていた。その先にはくすんだ藍色の海が見える。席に座ると、皆話す事に困っていた。不さんのことを話さずにはいられないのだろうか中々切り出せない。店の名前をもじったり、九州出身のシゲちゃんのエントネーションを真似たりして遊んでいた。そのうち、料理が来て、僕はただ、タレと肉汁の混じった液体が鉄板に焼き付く音を聞きながら、生焼けすぎるハンバーグに火が通るのを待っていた。お店側のミスではない。お客様の目の前で焼き上がるというコンセプトメニューなのだ。ダブルチーズハンバーグのセットは一七八五円で、大学生のお昼ご飯としては破格に高い。しかし、チーズハンバーグのセットでも一二六〇円と十分に高い。僕は一〇〇〇円を超えるともはや財政の事はどうでも良くなってしまふ質なのだ。それよりも、早く食べたい。習慣的にほとんど朝ご飯を食べないから、昼時はとてもお腹がすいているのだ。焼けよ焼けよ、とナイフで肉を鉄板にジュウと押し付けたり、箸でぶすりとと肉汁の色を確かめたりしていた。

（親の期待に答えてくれるいい子でした。）

喪主の挨拶で、不さんのお母さんがそう言っていた。中学から神奈川有数の進学校に通い、浪人する事なく慶應に来了。孝行息子だと思ふ。このまま行けば、銀行員か商社マンになって、三〇前に課長になって、甲斐性のある綺麗なお嫁さんをもらう。そういう種類の期待に応えるのが苦痛だったのだろうか。

今回の事で不さん家族と連絡係をやった谷やん曰くそういう訳ではないらしい。お母さんとしては、普通の就職はしなくていいから、例えば哲学の研究者を目指したらどうか、という話をしていたと言う。確かに不さんは哲学の授業を六つぐらいとっていた。生協の本屋に行くと、これは〜と、説明してくれた。『ソークラテースの弁明・クリトーン・パイドーン』というタイトルを見て笑っていた。不さんの教養は僕には計り知れなかった。ただ、不さんとしては大層自分が嫌いだったので、あまり前向きでなかったと言う。また、ある時は国連の職員になって貧しい国々の人々のために働きたいという事を、真剣な口調で語っていたと言う。

こういう話は僕にとって意外なものだった。不さんは少し生きる気力が足りないタイプで、それでも慶應に來ているように、これから先の人生でも、世間の隙間を縫って生きていくのだと思っていた。僕はそれを参考にして生きていこうと思っていた。人生のロールモデルを失った。

活力を根源とした自己顕示欲のようなものが無いと思っていた一方で、ガツガツした不さんを見ることも、今思えば多々あった。僕が二回生の時、サークルに可愛らしい女の子が見学しにきた。その子はドラマー志望で、ドラマを出して叩いてみることになった。その時に、エキシビジョンとして始まった不さんによる超絶技巧を交えた *Let Nepal!* メドレーが余りに長くて、あきれた覚えがある。他にも、不さんは人一倍おしゃれである。ただ、おしゃれというのは女の子にモテたいということで、モテたいということは活力がある、と考えるのやや短絡的かもしれない。学園祭では黒いスーツに黒いシャツに黒いネクタイをしていた。

僕には不さんという人間の少しも分かってないのかもしれない。

食べ放題のカレーがおいしい。粘度の高いルーで、あまりスパイシーじゃない僕好みの味だ。大きな宝石のようなカットの人参、とろっとした品種のジャガイモが惜しみなく入っている。牛すね肉もひと掬いで二〜三個入っている。それから、得体のしれないゴツゴツした塊が入っていた。ルーにまみれていて何かよく分からない。食べてみるとひき肉だった。三種類のサラダも食べ放題だけど、主義として野菜は食べない。カレーは結局、五杯おかわりをした。

駅に着くと、ライブの後かのように、皆あっさりと日常に帰っていった。ぼくは何となく気持ち悪かった。レストランに入った時から海に行きたいと思っていたので、さとやんを誘って、海に行くことにした。

南口のロータリーから南に長く真っすぐな道が延びている。その先に黒い点が見えて、目を細めた。海辺の防砂林だろう。ステーキ屋から見る限りではすぐ近くのように感じたが、こうしてみるととても遠い。さとやんの顔を確認したが、特に止まりそうな気配はなかった。三分と歩かない内に商業地域を過ぎた。駐車場や空き地にポツポツ人の住む家が現れ始める。そのうち、本格的に住宅街になった。時より、しゃれた平屋がある。オレンジ色のレンガで出来た門だったり、白壁だったり、燦々と太陽が降り注ぐカリフォルニアを思わせるような家だ。アウトドアなSUVや少し奇をてらった趣味の外車がガレージに停まっている。僕たちは歩きながら、就職活動の話をしていった。東日本大震災で企業の採用が遅れている中で、共通の知り合いがトイレの代名詞といえる企業に内定をもらった。最終面接の前日にはショールームに向いて、様々なタイプの便器を子細に観察し、実際に座ってみたそうだ。日本人の排泄行為は自分が支えると言っていたらしい。僕は昔から、そんな風に何にでも積極的にコミットしていける

人間が疑わしかった。小学校で演劇を見に行った後に、如何にも感動したというような感想を書く人間が、疑わしく、憎たらしく、そして羨ましくあった。

片側二車線の県道を渡ると、木々がかなり近くに見えている。右側にはナメクジの群れのよな団地がある。左側には高校がある。壁に「SHIT」と書いてあった。学校名の略らしい。谷ヤンも同じように、見上げていた。

「シット？」

浜辺に行くにはトンネルを通る必要がある。トンネルの入り口脇に、白いひげの無愛想な老人が座っていた。よく見ると、横たえてある杖は流木だった。なるべく平静を装って、見ないように通り過ぎる。こつちを見ていた。黒いスーツを来て海に来ているのが奇妙だったのだらう。

一三四号線下のトンネルを抜けると、浜辺に出た。茫漠とした黄色い空がひろがっている。その下では紺色の海が白く反射し、土のような色の砂浜が赤く照らされていた。どちらを向いても、海岸線が延びていた。はじめのうちは、相応の遠近感を保ちつつ、陸地をえぐるように弧を描いていく。ある地点を境に遠近感を失い、海側へスーッと伸びる直線となってしまう。左の海岸線を辿っていくと、うみべのラブホテル群は徐々に小さくなっていき、人口的過ぎる直線に収束する。目を凝らすとそれは陸地から渡された橋で、その先にフライドチキンみたいな江ノ島があった。右を向くと、まず富士山が大きく霞んでいるのが見える。というよりも、富士山が霞の奥から僕らを見下ろしているのだった。その左下方にも一連の山々がある。箱根だ。さらに、その下に海岸線が弧を描いて火の玉のような太陽の下へ消えていった。ゴールデンレトリバーが駆け回っている。浜辺では、飼い主がfrisbeeを投げていた。カップルが体育座りで、海を見ながらおしゃべりしている。サーフィンボードを抱えて、沖へ泳いでいく人もいた。皆、思い思いに春の海を楽しんでいた。その中に黒いスーツの僕らも思いのほか馴染んでいたと思う。「葬式の後には海に来て、まるで異邦人みたいだな」とさとやんが言った。「はあ」と、僕は『異邦人』の話の思い出そうとしていた。たしか、母親のお葬式の後、女と海に来る。その後、人を殺す。僕は周りの人を一組ずつ一通り眺めた。別に誰も殺す気は起きなかった。世界が黄色く霞んでいて、僕たちもその中で次第にぼやけていった。

僕はあの日の海を写真に撮ったけど、いつか怒りに任せて携帯ごと叩き割ってしまった。気持ち落ち着いた後、父が買ってくれた日の事を思い出してとても悲しくなった。

不さんは自殺する半年前、さちこさんと湘南の海を見に行ったらしい。そういえば、三田祭の打ち上げに二人がいらないのを僕は不思議に思っていた。抜け出した二人はファミリーレストランで夜中じゅうおしゃべりをして、始発で湘南に向かった。僕の家からは、明け方の四時半頃、東海道線が行く音が聞こえる。子供の頃の寝れない夜は、15両編成の東海道線が、闇に沈む高層ビルの足下をヘッドライト煌煌とさせて走り抜けていくのを、壁際に寄せた布団の中で想像した。不さん達は、その列車に乗って、湘南のどこかの駅で降りた。そして、まだ寝静まった住宅街をゆつくりと歩いていった。

一三四号線を越える歩道橋を渡ると海に出るが、まだ暗い。夜の海は、深淵を覗き込むような根源的な恐ろしさがある。視覚的な情報が少ないから五感がわさわさと動きます。波が押し寄せて、弾け、しゃりしゃりと砂に吸いこまれていく音がひたすら聞こえる。湿った風が掌やうなじを撫で回し、夏ほどではないが生臭い匂いがする。汚物とも化物ともされない巨大な有機体の奥底に吸い込まれていくことを終始想像してしまう。

そんな夜の海を前にして、二人で夜明けを待った。次第に、水平線から白色が滲みだす。白色は次第に鮮烈な紅色になる。その移ろいの中に、海へと崩れ落ちる一万年前の氷河や、太陽をすかして見た小さなさくら貝、南の島で食べた採れたてのトロピカルフルーツとか、色々な記憶が垣間見える。

タイミングは分からないが、不さんはさちこさんに好きだということを変えたという。

「わたし、付き合うってよく分からないの……」

その後、二人はキスをした。付き合うというのはよく分からないけど、仲良くしましょうというこらししい。その後も、不さんとさちこさんは定期的に会っていた。

「何でも話せるガールフレンドがいるんだ」

不さんはお母さんにそう言っていたという。

いかにも世捨て人のような雰囲気醸し出しながら、案外人生を楽しんでいるじゃないか。僕は握りしめていた氷水を一気に流し込んだ。サークル〇〇の里子さんが不さんの話をするというから、すごく身構えていたのである。また、不さんは就職活動もしていたという。卒業後のことも少しは考えた瞬間があったのだ。ただ、里子さんいわく、訳の分からない会社ばっかりだったらしい。

そうした話の一方で、東日本大震災をきっかけに不さんは精神状態が悪化していった。四月の後半には、食べ物の味が分からなかった。中庭で会った時は普通に話していたので、僕はこ

の事に全く気付いていなかった。四月末のある日、不さんはさちこさんをお茶に誘った。精神的に参っている感じではあったが、割といつも通りだったという。ただ、帰り際に不さんはさちこさんの手を数秒感に渡って力強く握った。

不さんの死後、さちこさんは不さんのことをボーイフレンドと呼ぶようになった。夢の中で不さんとデートしているという。また、不さんファンだった後輩の女の子と、一緒に不さんのことを、「神の御子」として崇めているらしい。

「神の御子」

里子さんはこの言葉に気持ち悪さを感じると言った。

「高潔なレベルの違う人間だったみたいにしちやうのは友達のことじゃないと思うのよ」

でも、本人はそう思われたかったのかもしれない。携帯の電話帳やパソコンのデータは全部消去されていて、遺書もない。俺はこの世に何の未練もない。悲しみも恨みもなく、ただ死ぬだけだという、フラットな感情を装っているような気がする。

結局、不さんと本当に親身になって話した人って言うのは、ほぼいなくて(さちこさんとは話したのかもしれない)、誰も何も働きかけようとしなかった。それが、里子さんは心残りだと言う。

「皆であのこを死なせてしまったような気がするのよ。」

なるほど。でも、仕方がないじゃないかと僕は思う。不さんは追いはぎにあって大けがして倒れている人とは訳が違う。イエスキリストの内なる悩みを察し、解決するようなものだ。

胸の奥に黒い真空が広がり、体がこわばった。勢いよくコップを傾けて、中身が空であることに気付いた。

自殺について

23:56 小山田 「痛みも苦しみもなく死ぬことのできる手段があるなら、僕は今すぐ死にます」

23:57 小山田 「両親や友達が悲しむ、生き続けていれば楽しいこともあるっていいですけど、

そんなことは死んでしまったら感じられないので、僕には意味のないことです」

23:59 倉木 「なるほど！でも、そもそも何で君はまず死にたいなんて思うの？世の中の何が

苦痛なんだっけ？」

23:59 小山田 「うーん苦痛というか」

2013/05/04(Tue)

00:00 小山田 「生きてれば、楽しいことがあるのも分かってるんですが」

00:02 小山田 「幸福よりもまず、諸々の苦痛を避けたいという気持ちが強いですよ」

00:04 倉木 「死後の世界が今より苦痛が無いとは言いきれないって言われたらどう答える？」

00:04 小山田 「死後の世界なんて信じていません、と答えるのは卑怯でしょうか笑」

00:05 倉木 「いや、いいんじゃないかな」

00:06 小山田 「その死後の世界の話って、例えば、虐待受けてる子どもを保護して施設におくろ
うとする人に、施設にもいじめがあるかもしれない、っていわれてるような感
じがします」

00:07 小山田 「要するに確率の問題です。100%苦痛を受ける世界と、苦痛が無いかもしれない
世界との、どちらにいたいのかって話ですね」

00:09 倉木 「小山田はじゃあ、苦痛が無いかもしれない世界に魅力を感じるのかあ」

00:12 倉木 「さっきの例でいくとき、施設でいじめがあったとしても、また他の施設に移るな
り、全然違うところに行くなり、言ってしまうばこの世界ってほぼ無限に逃げ
道があるじゃん？」

00:12 小山田 「は？」

00:12 倉木 「そこに気付かずに死ぬ人は多いけど」

00:13 小山田 「そうですね」

00:13 倉木 「でも、死後の世界って『逃げ道』があるかすら分らない？って言われたら？」

00:13 小山田 「えっと」

00:13 小山田 「あるかどうか分からないというのは、積極的な否定じゃなくて、あえて最悪の状
況を想定する必然性がないというか」

00:15 小山田 「あれですよ、確率論です。この世で生きることが苦痛を伴うのは100%です。

ですけど、死後に関しては分からないから、サイコロを振り直すんです！」

00:16 倉木 「あー、そうだ。やっぱり自殺する人っていうのは賭けてる訳だ！」

00:16 小山田 「そうですね！分からない世界だからこそ、飛び込む魅力があるわけです。科学を
信じる以上、この世以上に苦痛を受ける確率よりも無になれる確率の方が高い
ですから！」

00:17 倉木 「なんだか、宗教とかマルクス主義みたいだね」

00:18 倉木 「死後、この世以上に苦痛を受ける確率よりも無になれる確率の方が高い↑これって、どうして?？」

00:19 小山田 「科学を信じる以上そうなりませんか?」

00:19 倉木 「どうと?？」

00:19 小山田 「苦痛を知覚する身体が機能しなくなる以上、」

00:19 倉木 「あー、たしかに」

00:19 小山田 「何も知覚できないんですよ」

00:20 倉木 「死後についてもあくまで科学に基づいて考えてるってことね?」

00:23 小山田 「より酷い世界Bにいくということは科学的根拠はないし、身体がなくなるとも知覚できるとっていうことも科学的根拠がないですよ」

00:25 倉木 「より酷い世界Bにいかないということも科学的根拠はないし、身体が無いと知覚できないっていうのも科学的根拠はないんじゃない?」

00:25 小山田 「んん」

00:26 小山田 「悪魔の証明的な話ですよそれは」

00:26 倉木 「〜でないことの証明は難しいっていうあれか」

00:27 倉木 「理不尽な議論だっっていうのは分かる。」

00:27 倉木 「例えば、血液型占いが科学的でないことを証明せよ、って言われたら完全に相関性がないっていうことは言えないと思うんだ」

00:27 小山田 「はっ」

00:27 倉木 「だけど、たぶん99%無いよってことは言える訳じゃない?」

00:28 倉木 「死んだ後についても、そうだと言いたい訳だね? ほぼ無に帰すことが出来る」

00:28 小山田 「そうですそうです!」

00:29 倉木 「血液型についてだったら、生きている人で実際に相関性があるか実験して、ほぼ関係が無いですよってことが言えるけど、死後については実証実験が不可

能だから、ほぼ大丈夫ってことも言えないと思うんだよなあ」

00:30 小山田 「僕はほぼ大丈夫だと考えるわけです。だって、体があるから知覚できるってことは科学的に分かってるんですから。」

00:30 倉木 「はあ」

00:32 倉木 「つまりさ」

00:33 倉木 「科学前提にした議論（＝死後も今と同じ世界）と科学に依拠しないオカルト議論は永遠に平行線なわけだ」

00:40 倉木 「そういえば前もこういう話をしたとき、有田が『自殺しちゃいけないことに根拠なんて無い』って言ってたよね。」

00:40 小山田 「言っていましたね」

00:40 倉木 「『根拠が無いから僕の意見は揺るがないんだ』って。」

00:40 小山田 「あれって、この世で生きる上では強い考え方だと思います。強い信仰を持っているようなものだと思います。」

00:41 倉木 「宗教ってよく分からないけど、ただ『自殺してはならない』だけじゃなくて、他のしきたりと関連して体系的にまとまっていたり、本当に幼い頃から言い聞かせられたりしてるからこそ、強い効果を持つかもしれないけど」

00:41 小山田 「はー」

00:41 倉木 「そういう前提なしに『自殺してはいけない』っていうのだけを何となく思ってるなら、何かの拍子で何となく死にたいな、と思った瞬間にコロっというってしまいうそで怖いと思うんだけど」

00:41 小山田 「ああ、そう言われると怖いですね」

00:44 小山田 「話戻りますけど」

00:44 倉木 「はいはい」

00:44 小山田 「僕はやっぱり、幸せを求めるより、苦痛を避けたいんです。」

00:45 小山田 「僕には絶えざる欲望があって、人生に色々と期待してしまいます。その度に不安や焦燥感にかられて、満足を覚えた瞬間でさえよくよく吟味すると安堵の瞬間でしかないんです。その安心感ですら一瞬のことで、すぐに失う不安を僕は感じ始めるんです。」

00:45 小山田 「作家の方で『ただ漠然とした不安である。』って言った方がいいましたよね？」

00:45 倉木 「『ただぼんやりとした不安』かな？芥川龍之介？」

00:45 小山田 「そうですね。あれが僕の感覚にはしっくり来ます」

00:47 小山田 「僕もそんな感じなんです、いつもいく先には苦しみがあつて人生には意味が無い
というか……芥川の論がどういうものかは知らないんですが、『ぼんやりとした
不安』っていう言葉がしっくり来るんです。」

00:48 小山田 「不安と期待は表裏一体なんですよ。それが煩わしくて」

00:48 倉木 「なるほど」

00:48 倉木 「麻雀だ」

00:50 倉木 「麻雀で負けるとすごく悔しいんだ。その日の朝にどうにか親から貰ったお小遣い
だったりすると、もう死にたくなる。二度とやるもんか、と思う。小山田みたい
なタイプだったらここで本当にやめちゃうんだけど、俺はまたやっちゃうんだ」

00:51 小山田 「じゃあ、倉木さんにとって生きる価値って何なんですか？」

00:52 倉木 「それはまあだから、やっぱ快樂かなあ」

00:53 小山田 「なるほど、生きていれば気持ちいいこと沢山できるってわけですね」

00:54 倉木 「刹那的だけどね」

00:55 小山田 「すごく納得してしまいました。『そう言われると思いつかないな』ていうの期待
してたのに！笑」

00:57 倉木 「でも、快樂がなくて死んでしまうっていう可能性は否定できないよ??」

00:58 小山田 「性的欲求ですよね」

00:58 倉木 「そう言われると動物みたいだなあ」

00:59 小山田 「笑」

01:01 倉木 「社会的欲求が満たされる快樂とかもあるよ」

01:01 倉木 「第一志望のゼミに落ちた時とか！」

01:04 小山田 「うーん、ゼミ落ちたのの何がそんなに嫌だったんでしょか」

01:04 倉木 「自分が想定していた形で、社会的に認められる場が無くなってしまった」

01:04 倉木 「あと、可愛い女の子と出会う失われてしまった。可愛い子は人気ゼミに多いんだ」

01:07 小山田 「今のゼミじゃだめなんですか？」

01:07 倉木 「楽しいけど、変な人だと思われてるからね社会的には笑」

01:07 小山田 「なるほど」

01:07 倉木 「俺は俗物的欲求にまみれてるんだ」

01:08 小山田 「そういうテーマで小説書かれたら面白いのに」

01:08 倉木 「ああ」

01:08 倉木 「俗物的な欲望にまみれてる一方で、なまじ小説書きたがったり、垢抜けない

バンドサークル入ったりして、欲望の反対側に向かってしまう人の苦悩を

書けばいいのかなあ笑」

01:09 小山田 「まさに笑」

01:09 小山田 「そういえば、芥川何か読んだことあります？」

01:10 小山田 「もしかしたら、僕と同じようなこと考えてたのかなあって思ってた。人生についての話なんですか？」

01:11 倉木 「感性が豊かならそういうのも感じ取れたのかもしれないけど、俺が読んだ限りではただの童話だった。読んだの中学生の頃だし笑」

01:11 小山田 「何ていうの読んだんですか？」

01:11 倉木 「杜子春」

01:12 小山田 「なんて読むんですか笑」

紅茶缶にお引っ越し

暗い部屋でパソコンを開きインターネットを見ていた。大学一年の頃にやっていたSNSサイトにアクセスした。友達検索で

『み』

とKさんのハンドルネームを入力して、エンターキーを叩く。出てくる筈のないものが出てきた。日記を見してみる。

『 日付：2010年10月7日

題名：紅茶缶にお引っ越し 』

カチカチ。

朝

嫌な夢を見た気がする。時刻は七時前だった。朝の日射しが、カーテンの隙間から入ってくる。二重ガラスを斜めに入射した光は、ガラス特有の緑色を帯び、クリム色の壁紙を透らしていた。その中心で、力ない雑草のシルエットが風に揺られて、淡いライムイエローの影絵を演じていた。細い幹は枝分かれし、その先につぼみのような種子を垂れている。

カーテンを開けると息をのむようなまばゆい朝だった。路地の先、隣駅の高層ビルの向こう側から指す赤みを帯びた黄色い光は、通り抜けざまに僕の胸から何かを掬いとっていくような光だった。残ったのは悲しさのような、美しさのような、切なさのような、幸福な空虚感だった。ふと、僕は消えてなくなってしまうかと思っただけ、本当に消えてなくなってしまう訳ではない。だから、抱えた枕に顔を埋めて、羽毛布団を抱え、ベッドの上で丸くなって、この時間をやり過ごした。

腹痛 reprise

書庫の方からやってくるのは真面目な女の子に違いない。装飾的な金色のアルファベットが刻印されたアカデミックな本を抱えている。簡易辞典ぐらいの厚さで、上半身を覆ってしまうほどの大きさがある。何の本だろうか。次の瞬間に彼女はその本を机の上に放り出した。密度の高い音が重たらしい僕の腹まで響く。ああ、そうだ、僕はお腹が痛いんだ。再び全身に寒気が走り、原因の無い焦燥感に襲われる。僕は深呼吸をし、眉間を指先で叩き始める。次にこめかみ、それから鼻骨、鼻の下、あご骨、鎖骨、わきの下、へその上、腰骨、大腿、半月板、くるぶしと叩いていく。すると、胸の違和感は、徐々に体を降りていき、最後には脚の裏まで押しやられる。誰に教わったんだっけか。

出口のドアを開けると、湿った熱風が僕を撫で上げた。夏の午後の熱気は、冷えた体に温泉のように染み渡る。薄着の女の子の制汗剤の匂いや視界に浸食してくる濃い緑色、アブラゼミとミンミンゼミの重奏と、溢れる生命力の発露としての世界が広がっていた。僕には、それが心地よかった。ウォッシュレットのある院棟に向かい歩いていると、生き生きとした人々の中

に黒髪の小柄な女の子が立ち止まっているのが目についた。書類の入ったクリアファイルをひさしにして、院棟を見上げている。さちこさんだった。知らぬふりをした。

再び、胸の違和感が広がり始める。それなのに、エレベーターに乗り込み、僕は八階のボタンを押してしまった。あの日の監視カメラには、何食わない表情で階段を登っていく不さんが写っていたという。壁を挟んで背後何メートルかにある、階段の薄暗さを想像してぞっとした。

八階は電気がついていなかった。その代わり、外から入ってくるほどの白い光が其処彼処に浮遊していた。階下から、女の子の談笑するのが聞こえるから、思ったほど恐怖感はない。エレベータホールを出て右の廊下の先に不さんが飛び降りた窓がある。窓際に花瓶が置かれていたことが思い出される。チョコレートが置いてあることもあった。今日は何か置いてあるだろうか。

窓にはチョコや花瓶の代わりに、真新しい金具が設置されていた。誰も見ていないか確認して、ロックを解除した。恐る恐る取手に手をかける。なるべく音の出ないように横に引いた。生温かい空気が舞い込んでくる。こぶし二個分の空いたところで、これ以上動かなくなつた。確かにこれでは自殺できない。それから、僕は不さんがしたように、窓際スペースに、廊下を向いて座った。それから目を瞑って、体を後ろに倒していく想像をした。徐々に重心が覺束なくなり、背中に力が入る。誰もいない廊下から天井へと視界が移っていく。この時点で上半身は外側に迫り出しているけど、窓枠に捕まっているからまだ落ちない。掌から汗がじわじわと滲み出してくるから、しっかり掴まなくてはならない。すぐに院棟の壁が見え、その先にあの日の鈍色の空が広がっていた。これが最後の空だ。いまだ、とばつと手を離した。

「ふう」

僕は目を開いて、立ち上がった。振り返って、下を覗き込んでみる。コンクリートの地面が遥か下に見える。誰も僕がここにいることを気付いていない。もしかしたら、と思い探してみただけ、さちこさんはもういなかった。僕は窓を閉めてトイレに向かった。